

アスリートアンバサダー活動  
インタビュー第2弾  
渡邊拓馬さん



藤本「それでは、これからインタビューを始めます。よろしくお願いします。」

渡邊さん「よろしくお願いします。」

藤本 ーバスケットをはじめたきっかけは何ですか？



バスケットをはじめたきっかけはですね、お姉さんが二人いて、僕が小学生になる時にはもうその二人がバスケットをやっていて、お父さんお母さんも、ミニバスのコーチをやっていたので、自然と自分も仲間外れにされないように始めたのが、最初のきっかけです。だからきっかけは、みんなとそんなに変わらないと思いますね。

安田 ー現役時代、何年かやっていたらしゃったと思いますが、一番仲が良かった選手は誰でしょうか？

一番仲が良かった選手、、、そうですね、みんな仲良かったですけど、田臥勇太選手とか、伊藤大司選手とか。先輩後輩の関係にとらわれず、仲良かったです。あと同期で、青野文彦っていう2m10くらいの選手がいて、彼も仲が良かったですし、みんな仲良かったです。

藤本「僕は、田臥選手に高校2年生の時に会いました。バスケットボールクリニックで、練習やっている時にそこで相手してたのは、田臥勇太選手だったかなと思います。ちょっとびっくりしたかなと思います。」

そう、田臥君もいろんな活動しているから、みんなと会ってるかもしれないし、これから会うかもしれないですね。みんなの練習にも、また今度来てもらいたいね。

安藤「福岡はなかなか難しいかもしれない(笑)」

落ち着いたらね。

安藤「はい、そうですね、ほんとに。」

安田「落ち着かないと何もできないですね。」

そうだよね。

安田「もう一つ、質問良いですか。拓馬さんが学生時代に、ウィンターカップに出られたのを、リサーチして調べたんですけど、能代と戦った時に、その選手の中に田臥選手とかはおられたんですか？」

そうです。決勝の能代工業との試合で、当時僕が高校3年生で、彼が1年生で試合したんですけど、まあその当時はお互いそんな仲は良なくて、お互いの存在を知っているような感じで、あとあとしゃべったら、お互いやっぱり他の選手とは、こう、感覚が違うという風に、マッチアップした時に感じたということをお話しました。その後一度、彼がハワイの大学から帰って来た時に、トヨタ自動車で1年間一緒にやったんですけど。最初の出会いは、その決勝戦ですね。1996年のウィンターカップの決勝戦で初めて対戦して、それ以降もしゃべったことはなかったんですけど、トヨタにくるまでは、2002年かな、田臥君がNBAにチャレンジする1年前に、一緒にやりました。

藤本「そうなんですね。」

安藤「ええ、すごい。」

安田「田臥選手は、日本人初のNBA選手ですからね。」

みんな知ってるもんね。今もやってるしね、40歳で。

安藤「そうですよね、すごいな。」



## 藤本 ー現役時代でも、今の活動の中でも、辛かったことは何ですか？

辛かったことはやっぱり、シーズン前の練習とかね、走り込みの練習とかが辛かったので、引退する直前とかは若手と同じように動けなくてストレスになって、それはちょっと辛かったですね。バスケットボール以外の練習がきつかったです。それ以外は特に辛いことはないですね。あ、でもシュート練習とか、自分の納得いかないシュートが、若い頃は多かったんで、そこで悩んだ時期はありましたね。

安藤「あ、それは私もありましたね。今うちの福岡はこのコロナのせいで全然1年ぐらいやってない状況なんですけど、私も最初のスペシャルオリンピクスに初めて出会ったのがバスケだったので、その時にやっぱり悩みましたね、自分の決めたいシュートが決まらないし、チームワークとかどうすればいいのか分からなかったりとかありましたね。」

同じような悩みがあって、自分の納得いくシュートがうてなくて悩んだ時期は、たくさんありましたね。

安藤「そうですよね、シュートは悩みますよね。」

安田「その思い通りにシュートがうてない時とか悩んだ時とかって、どう解決をしましたか？」

解決方法は、シュートが入らない時はいつも通り練習はするんですけど、逆に追い込みすぎず、リラックスすることを取り入れて、休む時間を増やしたりとか、あと休む日はバスケットから離れて過ごしたりしたのがひとつと、あと最初ルーキーの若い頃は、自分の数字、結果を出したいと思ってばかりいたのを、やっぱりチームで勝ちたいっていう意識、味方のために、チームのために、スタッフのために、ファンの方々のためにっていう思いが出てきてからは、自然とボールが軽くなって、シュートの確率が上がったように感じたので、そういう思いを今は伝えていきますね。思いだけで変わったっていう。

安藤「そうなんですね。バスケから離れてっていうのは、一体どんなことをされていたんですか？」

普通に買い物行ったりとか、お友達と食事に行ったりとか、息抜きにたまにお酒飲みに行ったりとか、そういうことですかね。シーズン中にあまりできないこととか。

安藤「そうですね、シーズン中はなかなかできませんもんね。」

そうですね。ほんとに何もバスケットのことは考えずに、離れるっていう時間を作りました。

安藤「それは、確かにいいかもしれないですね。」

「あと、お父さんとお母さん、お姉さんたちの影響を受けたって言ってたんですけど、一番影響が大きかったのは、どなたですかね？」

バスケットに関しては、一つ上のお姉さんが今の桜花学園、昔の名古屋短期大学附属高校っていうところに行って、最初自分よりすごく上手くて、全国的にも有名だったので、お姉さんの影響は大きいですね。姉を追い付け追い越せで毎日練習していましたね。プレーに関してはお姉さんの影響が大きくて、あと人としての考え方っていうのは、お父さんの考え方とか、影響が大きいかなと思いますね。

安藤「ありがとうございます。そうなんですね。」

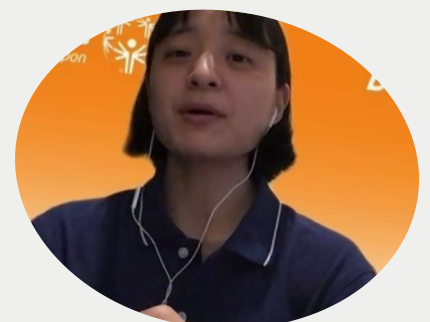
藤本「拓馬さんは、芸能界で一番憧れている人は誰かいますか？」

芸能界か(笑) ファンってこと？芸能界はそんなないかな、あんまりそういう人は今まで。バスケット界だったら、マイケルジョーダンに憧れて、いろんなプレーを真似したりっていうのは、小さい時ありますけど、芸能人はいないなあ。

藤本「わかりました。」

安藤「やっぱりバスケっていったらマイケルジョーダンですね。」

そう、今でもいろいろ映像出てくるしね。



安藤「そうですね、バスケで探したらほんと一番に出てくる。」

そうだよね。

安田「マイケルジョーダン以外に、憧れているというか、好きだったなあっていう選手はちなみにいますか？」

好きだった選手は、みんな知ってるか分からないけど、ポールピアースっていう選手とか、引退しちゃったけどね、ボストン・セルティックスにいた選手。かな。

## 藤本 一拓馬さんは、好きな四字熟語は何でしょうか？

四字熟語か(笑)。四字熟語は考えたことないな。でも、「なんとかなる」っていうのはずっと思っているの、何か嫌なことがあってもね。そう、なので、四字熟語は探します(笑)。

みんな(笑)

そういう質問もくるんだな(笑)。



安藤「これに関連してなんですけど、それを聞いてすごく支えになったとかいう言葉はありますか？なんとかなるとい言葉も、ひとつだと思うんですが、他にも、これを監督とかに言われて、もっと頑張ろうとか思ったとかありますか？」

大学時代に、仲良い後輩に言われた言葉で、僕けっこう試合とかで緊張するんですけど、その彼も誰から聞いたかは分からないですが、「いい選手、素晴らしい選手ほど緊張するんですよ」という話を聞いた時は、けっこう、体が軽くなったというか、緊張って悪くないんだなっていう考え方に変わったので。それまでは緊張することは、自分のプレーが制限されるようで嫌だったんですけど。今も子どもたちに、緊張するのはどうしたらいい？と聞かれるんですけど、その「いい選手は緊張するんですよ」というアドバイスを、自分にもいいながらも、子どもたち、みなさんにも通じることだと思っていて、それはけっこうためになりましたね。楽になったというか。

試合前みんなも緊張するでしょ？

安藤「あ～しますね。」

安田「めっちゃくちゃしますね。手汗がやばい(笑)」

藤本「緊張することもありますけど、無駄な力が入ることもあるかなと思いますね。」

安藤、安田「あー、それもわかる！無駄な力も入るね。」

その時は、このことをちょっと思い出してプレーに臨むと、平常心でできたりとかしたので、みんなも緊張した時は思い出してみて。緊張してるなと思ったら、自分はいい選手なんだと言い聞かせれば、自信も出て、いいプレーも増えるかなと思います。

藤本「わかりました。」



## 藤本 —1 番印象に残った大会は何ですか？

一番印象に残った大会はそうですね、いろんな優勝とかもしたんですけど、みんなのアブダビの試合もすごい良かったんですけど、今自分がいろんな仕事をできているきっかけになったのが、さっき言った、1996年の田臥君と試合したウィンターカップの決勝戦、その試合の影響が大きいかなと思いますね。印象に残っている試合ですね。

藤本「ありがとうございます。」

安藤「その印象に残っている試合で、このシーンがとか、今でも覚えているなというものはありますか？」

そうですね、田臥君とマッチアップしたシーンは今でも覚えていますね。

安藤「おおすごい。」

あとは、最初の得点のシーンとか、今でも覚えています。それぐらい、インパクトのある試合でしたね。

安藤「なるほど、残るものなんですね、やっぱりいい試合をすると。」

そうだから、高校の時の試合で、こう、自分の方向性が決まったような試合だったので、今の子どもたちには、そうやって、決まってしまう試合でもあるから、一試合一試合ね、一生懸命情熱を持って臨むようにという話はたまにしますね。

安藤 —今現在の話になるんですが、今スペシャルオリンピックスで、ドリームサポーターをされていると思うんですけど、それを知ったきっかけって何ですか？

知ったきっかけは、アルバルク東京っていうチームにいた時のご縁で、スペシャルオリンピックスさんがアルバルクのホームゲームに来ていただいていたとか、アルバルク東京を辞めるタイミングで、スペシャルオリンピックスという存在を、有森さんから話をいただいて、知りました。

きっかけは、辞めていろんな活動をしていきたいということ、トヨタの方とか、有森さんにご相談したところ、ぜひバスケット界から、今ドリームサポーターがないので、バスケット界でも、こういう活動をしているということを知ってもらうためにも、ぜひやっていただきたいということで、やるようになりました。

他のスポーツからは、いろんなレジェンドの方が参加していると聞いていたんですけど、バスケットボール界からは、なかなかこういう機会が今までなかったらしいので、それで、じゃあやってみようかなという思いと、有森さんからの熱意があって、ですねきっかけは。

安藤「そうなんですね。なるほど、ありがとうございます。」



## 藤本 ー現役選手の中で、気にかけている選手はいますか？

気にかけている選手はそうですね、仲良い後輩はたくさんいますけど、6月から、京都ハンナリーズっていうチームのGMをすることになったので、その京都ハンナリーズのチームの選手は、気にかけていますね。

安藤「初めていくところだからっていうのもあるんですかね？」

そうですね、初めてだし、そのチームを強くしないといけないので、バスケットボールに専念できるような環境を提供するよというのと、あとは選手のコンディショニングとか、あとメンタルのところとかも、気にかけたりしないといけないので、今はそうですね、チームの選手たちを気にかけてますね。

藤本「わかりました。ありがとうございます。」



## 安田 ーバスケットをやっていて、楽しいと思う瞬間はいつですか？

そうですね、現役の時は優勝したりとか、自分が活躍したりとか、シンプルなことで楽しいと思いましたが、今引退してからは、バスケットを通じて、みんなとか、いろんなジャンルの方との出会いがあるので、あとは知らない土地に行って、いろんな子たち、いろんな関係者の方々に会って、その方々を通して、バスケットのことだったりとか、その土地のことを教えてもらったりとか、そういうことが今は楽しいですね。出会いがあるので、それが楽しいですね。

安田「ありがとうございます。」

安藤「その出会いの中で、もちろんみんなに会えてよかったと思うんですけど、この人に会えてよかったと思う人はいらっしゃるんですか？」

そうですね、この人っていうのはないんですけど、やっぱり、いろんな方が同じくらいの出会いで、そこから、いろんな方にまた、出会いが出会いに繋がるので、ほんとにすべて同じ出会い、同じ話はないので、どの出会いもやっぱり、貴重でしたね。

安藤「なるほど、ありがとうございます。」

## 安藤 ー今、コロナのせいで、いろいろ動けない状況じゃないですか、福島ファイヤーボンズの活動は、今どんな感じになってるんですか？

ファイヤーボンズでの僕の仕事は、ユース、U10からU18の子どもたち、そういうユース活動のシステムの構築のお手伝いで、Bリーグには、ユースカテゴリー、子どもたちが活動する環境を整えないといけない、という決まりがあって、その構築のアドバイスをするお仕事なので、福島県ってすごい広いので、一定の市だけで活動するんじゃなくて、全域に広げないといけないので、そういう場所を決めたりとか、どういうシステムで子どもたちを成長させるのか話し合いをしながら、ユースの各クラスを今、増やしてる段階ですね。郡山市ってとこがあるんですけど、そこを

メインに、もっと全域に広げて、各地域、福島県全域の子どもたちが、そういうユースの練習に  
触れられるようにしよう、と活動しています。

安藤「なるほどですね。じゃあ今は、福島全体に、バスケやる子たちを増やしているって感じですかね？」

そうですね、環境を作っていってますね。

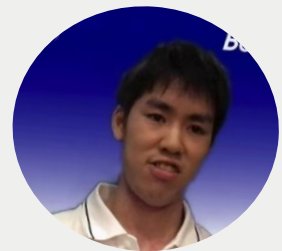
安藤「なるほど、ありがとうございます。」

## 藤本 一拓馬さんは、バスケを始めたのは、何歳くらいから、何歳までやっていましたか？

始めたのは、6歳とか7歳くらいの時です。で、引退したのが、38歳かな。

安藤「じゃあ小学校1年入った頃ですね。」

そうですね、1、2年生の頃から始めましたね。



安藤「今現在、バスケって、ぶつかりあいのせいで、なかなか活動できないじゃないですか。練習とかはどのような風に  
されてるんですか？」

練習は、Bリーグの選手とかは、PCR検査を受けて、頻繁に練習するわけではないんですけど、みんなと同じように、  
対策をしながら、バスケット以外の時は、密にならないようにとか、そういう基本的なことに気をつけながらやって  
いますね。

安藤「なるほど。私の福岡では、今できない状況だから、何もやっていない状況なんですよ。ボールすらも、もう1  
年ぐらいたぶん触っていない状態にいるので、それでなにか、できる方法ってあるのかなと思っていて。」

そうですね、ボールは使えないですけど、家の中で、ありがちだけど、体幹のトレーニングしたりとか、いろんな映像  
を観てイメージしたりとか、かな。あとは、ランニングとかウォーキングをして、リラックスしたり、人混みに入らず  
できることっていったら、そういうことくらいかな。あとはみんな、これから大会で、いろんな場所に行くと思うの  
で、僕もそうですけど、時間使って、英語とか勉強してもいいのかなと思ってますね。  
海外の方と、話せるようになると、視野が広がると思うから。

安藤「そうですね。わかりました。今の状況で、取り入れられるかどうか、取り入れられるように頑張ります(笑)」

自分に合ったものを、無理することなく、合ったものを見つけて、適度にできればいいかなと思いますね。

安藤「はい、わかりました。ありがとうございます。自分に合うやつを探してみたいと思います。」



**安藤** —さっき話していた福島ファイヤーボnzの育成で、子どもたちにどうなってほしいですか？例えば、プロの選手になってほしいとか、願いはありますか？

そうですね、もちろん、プロのバスケット選手になってほしいという希望はありますが、一番は、バスケットというスポーツを通じて、彼らが大人になっていく過程で、そういうスポーツを経験して、スポーツの素晴らしさとかを理解することで、どんどんそういう魅力を自分の近い人たちに伝えていける、スポーツをしていて、バスケットボールをしていてよかったと思える人になってもらえたら、というのが一番なので、途中でバスケットボール辞めても全然いいと思いますし、これから社会に出て、いろんな悩みがあった時に、スポーツでストレスを発散したりとか、スポーツのおかげで楽しい人生を過ごせるような、そういう気づきを、ファイヤーボnzでは、感じてほしいなと思っていますね。そういう人になってほしいです。

**安藤** 「はい、ありがとうございます。」

**安田** —3x3 とかいろんな競技があると思うんですけど、僕はその 3x3 にものすごく興味が出ていて、SO でこれから、3x3 が広まっていったらいいなと思っているんですが、何かアドバイスはありますか？

そうですね、まずは、今やっているチームで、3x3 をやってみるのがまずスタートかなと思いますね。そこで楽しさをみんなに共感してもらって、じゃあ何かのイベントで、3x3 の大会をしようとか、そういうことに繋がると思うので。まずは自分たちの仲間、チームでやってみて、楽しさを感じるのがスタートかなと思います。それをまたみんなに伝えてっていうのがいいと思います。

**安田** 「はい、ありがとうございます。」

**安藤** 「私の福岡では、女子が全然集まらなくて、今やっているのが 3 人くらいしかいないんですけど、どうやったら集まるというか、楽しさを伝えられるでしょうかね？」

それこそ、3x3 とかやれたら、楽しさがわかりやすいかなと思うので、まだコロナが落ち着いていないのできついかもしれませんが、そういうバスケットの魅力を積極的に伝えていくこと、自分にできる範囲で。なので、SNS を使ったりもいいですし、身近な友達に感想をしゃべったりとか、スペシャルオリンピックスの活動を通じて、B リーグの選手とか、イベントにも出るとか、そういう話もしつつ、自分が参加したってことをどんどん伝えることが近道だと思うので、そうしたら、同じ考えを持った子が入ってくれるんじゃないかと思いますね。

**安藤** 「なるほど、じゃあやっぱり、まずはもっと自分たちで楽しさを知って、そこから SO だったら、今、SNS で広めようとしているから、そんな感じでやっていったらいいってことですかね？」

そうですね、自分が辛くならない程度で。あとは、自分が楽しんでやっていたら、自然と広まると思うので、まずは自分が楽しむことが大切だと思います。

**安藤** 「はい、そうですね。ありがとうございます。」





## 藤本 一拓馬さんは、試合前の時で、一番聴いている曲は何でしょうか？

あんまり曲は聴いていなかったですね。試合前にはあまり聴かずに、余計な情報を頭にいれずについていう感じで。とりあえず、自分がいいプレーをしているイメージをもって試合に臨んでいたんで、音楽はあまり聴かなかったかもしれないです。

藤本「そっか、そうなんですね。」

安藤「普段もそんなに音楽は聴かないですか？」

普段はたまに聴きますよ。



藤本「どういう曲を聴きますか？」

日本でヒットしている曲とか、有名になっている若い子が聴いている曲も聞かし、あとは洋楽も聴きます。R&Bとかヒップホップも聞かし。自分がいいなあと思った、耳に残った音楽は聴きますね。

安田「僕からひとつ、音楽から繋がるんですけど、読んでいる漫画とか、おすすめの漫画とかありますか？」

おすすめは、やっぱりスラムダンクですかね。

みんな「やっぱりそうですね。」

安田「スラムダンクは、映画化が決まって、今大注目ですね。」

安藤「やっぱりスラムダンクが一番きっかけですか？」

そうだね、スラムダンクは僕が中学くらいに始まっていた漫画なので、読みながらプレーしていた感じかな。

安藤「その中に出てくるプレーとかを真似されてたんですか？」

プレーというよりは、毎週楽しみに待っていたような、どういうストーリーになるのかなとか、かな。

安藤「なるほど、そうなんですね。」

安田「俺らだったら、黒子のバスケが主流だけど、拓馬さんたちの中学時代は、スラムダンクなんですね！」

やっぱ世代が違うもんね。

安藤「違いますね。でも兄が見てたから、私もちょっとだけ見てました。」

安田「今バスケット漫画で、switch っていう漫画もあるので、拓馬さん読んでみてください！おすすめです(笑)この間、小塚(崇彦)さんにもおすすめしましたけど、拓馬さんにもおすすめします。めちゃくちゃおもしろいです。」

わかりました、聞いたことあるな。ありがとうございます。

藤本「今拓馬さんは、ドリームサポーターやられていますが、やっていない時に、  
なにかゲームとかやられていませんか？Switchとか。」

コロナになったばかりの頃は、家族でどうぶつ森とか。今は全然手つけてないので、やばいんですけど(笑)

みんな(笑)

ちょうど1年前くらい、2020年の時はやってたかな。

藤本「僕はオリンピックのゲームやってるんですけど」

おおいじゃん！

安藤「あるよね！」

安田「あるね！俺も持ってる！」

安藤「持ってるんだ！Switch買いたいけど、なかなか買えない、高い(笑)」

藤本「吉田沙保里選手とか、桐生選手とかも含めて、入ってますね！」

安藤「ああそうなんだ！」



**安藤** バスケットの試合の時、今はあまり起きなくなっているんですけど、なかなかシュートが入らない時とか、相手に邪魔されてボールを取られた時とか、すごくイライラしてしまうことが多かったんですね。それを抑える方法ってありますか？

そうですね、やっぱり、僕も感情が低すぎても高すぎても、練習の通りプレーできないっていうのを経験してきたので、練習の時のメンタル状況が一番いいと思っていて、でも集中とか緊張がなさすぎてもダメなので、そういう自分なりの方法を見つけることが大事だなと気づいていて。人からアドバイス、例えば僕が今アドバイスしたとしても、その人によって、それは合わないかもしれないじゃないですか。なので自分だったら、どうしたら抑えられるかなっていうのを見つけないといけないので、だから、日頃から、練習も試合のような気持ちで臨むことで、そういう解決策を練習で見つけることができるので、イライラした時も、グッと堪える、どうやったら堪えられるのか、何か違うことを考えるのか、例えば一回練習を抜けるのか、交代するのかとか、いろんな方法があると思うので、そういうことも試しながら、自分に合ってるものを見つけるのが大事だと思います。僕も経験しないと、解決策が見つからないので、今イライラするとか、そういう経験をした段階なので、経験した意味をしっかりと理解して、解決するスピードが遅かれ早かれ、ステップアップできるように、同じミスを繰り返さないように、次の試合はイライラしないと言い聞かせて臨むことしかできないと思うので。あとは、どういう時にそうなってしまったか原因をしっかりと知ることですね。もし、シュートをしてブロックされてしまった時にイライラしたんだったら、ブロックされないような工夫をしなきゃいけないし、ディフェンスに当たられてボールを取られた時だったら、それを取られないようにするにはどうしたらいいとか、さかのぼって原因を見つけることが大事だと思いますね。

安藤「自分に合ったものをみつけて、それを取り入れるっていうか、やってみて、それでも合わなかったら、また一番最初から探し出すっていう感じですかね？」

そうですね、最初からっていう風にはならないと思うので、絶対やることでレベルは上がってきていると思うので、ちょっと戻るけど、またその分進めるので、問題ないかなとは思うけどね。

安藤「はい、わかりました。もう1年以上やってないので、ちょっと自分でも怖いんですよね。大会の時とか、またイライラが出ないかなとか。昔みんなに当たってしまったことがあったんですよね、なんで！って自分勝手にやってた時があったので、それが出ないかっていう心配があったので、アドバイスがあればなと思って。でもすごく、よかったです。」

あとは、そういうイライラした時に、それを見てる人とか、関わっている人が、どんな思いをしているかとか、ちょっと嫌な思いにならないかなとか、人のことを少し考えてみるといいかもしれないですね。自分がやられたら嫌なことは、やらないようにかな、それはバスケットに関わらず。

安藤「そうですね。はい、ありがとうございました。」

安田 ー現役とか学生時代に、バッシュ履いていたと思うんですけど、おすすめのブランドとか、ありますか？

現役の時は、NIKE を履いていたんですけど、今は、アルバルク東京にいたこともあって、アルバルク東京は、adidas がスポンサーで、その当時 adidas の方にすごくお世話になってて、今もお世話になってるので、今は adidas を履いているので、今は adidas がいいかなと思いますけど、ま、それはやっぱ、みんな足が違うので、自分に合ったものがないと思いますね。

安田「僕も今、adidas を履いてるので！」

藤本「僕は ASICS のゴールドを履いてますね！」

安田「ASICS もいいね！」

シューズは最近、いいのばかりだからね。

安田「そうですね、今いいのがめっちゃくちゃ出てるので。」

安藤「めちゃめちゃ出てる、いろんなところから出てるから、もうどこを買えばいいかがわからなくなっちゃいます。」

安田「それもありますな。」

藤本「拓馬さんのバッシュのこと話してましたけど、靴のサイズは何センチなんですか？」

32 センチです。

藤本「でか！！」

安藤「でかい！32！」

はい(笑)



安藤「えー32の人に会ったことないかもしれない。」

バスケット選手はみんな大きいよ。

安田「プロ選手は、足のサイズデカイ人が多いですよ、たぶん。」

うん、多いね。



藤本 ー拓馬さんは、ライバルの選手は誰ですか？

ライバルは、いなかったかなそんなに。同じポジションの人はたくさんいるし、誰かに執着したら、他の試合に影響もあるしと思ったので、そういうのはあんまりつくらなかったですね。臨機応変に柔軟に、なんでも対応できるようにしてましたね。

安藤「おお、すごい。」

ライバルつくと、その人には感情入るけど、その人以外で差が出たりするので。

みんな「そうですね。」

安田 ー最後になりますが、アスリートアンバサダーこの3人がいるんですけど、何かアドバイスとかあったりしますか？

こういう厳しい状況ですけど、こういう経験をできるといったところも、今、僕も含め、この時代を生きるみなさんの使命だと思うので、こういう時をどう楽しく生きていくか、ポジティブに生きていくかっていうことを、次に伝えていけるようにしなきゃいけないと思うので。下を向くことなく、常に前を向いて、バスケット以外のことも楽しくやっていければと思うので、お互いを支え合って、ひとりで抱え込むことなく、この活動をしていってほしいなと、コミュニケーションをしっかりとって、これからも活動していってください。

みんな「はい！ありがとうございます！」

安田「これでインタビューを終わりにしたいので、アスリートアンバサダーひとりひとりから感想を言いたいと思うので、最後に拓馬さんにもふるんで、僕たち3人がしゃべる間考えておいてください(笑)。今日は貴重なお時間をありがとうございます。僕にとって、憧れの拓馬さんなので、いろいろなお話が聞けてよかったと思いますので、また会う機会があれば、よろしくお願いします！」

藤本「本日はお時間いただきありがとうございました。こういう厳しい状況ですけど、SOのアスリートの人と一緒にみんなも含む、頑張っていきたいと思います。本当にありがとうございました！」

安藤「拓馬さん、貴重なお時間を本当にありがとうございました。バスケットの選手とか、女性っていうのもあって、



なかなか話す機会がなかったので、こういう機会がいただけて、本当に嬉しく思います。  
また機会があれば、このアスリートアンバサダーのミーティングにも遊びに来てください。本日本当にありがとうございました。」

渡邊さん「はい、ありがとうございました。」

安田「最後に、拓馬さんからも今日の感想をお願いします。」

こういう時間をいただけたのは、本当に嬉しかったのと、感謝しかありません。この状況が落ち着いたら、もちろんコート上でみんなと会えると思うので、それまでは、さっき言ったようにね、下を向くことなく前を向いて、お互い楽しく過ごしていければなと思うので、それまでお互い支え合っていきましょう。今日はありがとうございました。

みんな「はい！ありがとうございました！」

安藤「今日はインタビューのお時間をいただきまして、ありがとうございました。これからのアンバサダーへの意気込みは、いろいろとみなさんと支え合いながら、楽しくこのアンバサダーの活動をして、もしもコロナが落ち着いたら、ぜひお会いする機会を楽しみにしたいと思います。本日は、貴重なお時間ありがとうございました！」

渡邊さん「ありがとうございました。」

みんな「ありがとうございました！」

